

赤木正雄博士の設計指導

大正 14 年（1925）ヨーロッパへの留学から帰国した赤木正雄博士は、内務省土木局勤務となり砂防の統括者としての立場となりました。以来、全国の荒廃渓流を踏査し、渓流ごとにその荒廃の原因、形態、地質等による分類を行い、それまでの画一的な砂防計画を改め、各渓流の特性に応じた工法を適用する砂防計画論を確立しました。

赤木氏は、夜間瀬川およびその支川の横湯川・角間川においても流路工を計画し、施工指導を行っています。明治年間の長野県工事、大正年代から昭和初期にかけての内務省直轄工事による、夜間瀬川砂防の成果を受けて、昭和 7 年（1932）から再び長野県による砂防工事が開始され、赤木氏の計画に基づいて行われました。

右上の写真は、その功績をたたえ、横湯川と角間川の合流点に建立された頌徳碑です。山ノ内町では現在も、砂防事業に尽力した赤木氏の逸話が「赤木落し」として地元の人々に呼び伝えられています。



赤木正雄博士の頌徳碑

先生は若い頃本県の湯田中渋の温泉街の裏を流れる横湯川、夜間瀬川の氾濫と災害防除の根本的対策工事に努力され、その工法として当時人々は全く知らなかった流路工を中心に昭和 7 年に着工、以来前後 25 年間終始取り組まれ遂に見事に完成していただいた。

その頃現地の荒廃した川筋を上ったり下ったりされたとき、先生がすべて谷に転落され腕を捻挫し怪我をされたのであった（しかしその怪我にも負けず腕を白布で吊るしたまま当時の唐沢俊樹内務省土木局長を案内されて日本アルプスを縦走された。この心意気まさに若き赤木先生の面目躍如たり）。

以来この谷の所を、赤木落しと呼ぶようになり、現在も地元の人々は呼び伝えている。

この度先生の寿像建立の台座の都道府県供石の、本県より 1 個の石は先生が思い出深いこの赤木落しの谷の石である。



赤木正雄博士の銅像(砂防会館前)



長野県供石